看護研究報告：

患者参加型の医療安全対策への取り組み

戸谷 ゆかり^{*}，山 本 直 人^{2*}

医療者と患者が目標を共有し、患者が積極的に医療に参加することが、安全な環境づくりの第一歩であると考え、平成18年4月に「医療安全組織文化づくり宣言」のパンフレットを作成し配布した。

「医療安全組織文化づくり宣言」の内容が浸透し、実践できているか配布2か月後に看護師に、配布5か月後に入院患者にアンケート調査を行ない評価、検討した。

結果は医療者・入院患者ともに約90%の人が「宣言内容」が実施できているとの回答であった。しかし、一部の職員が実施できていないという声もあり、今後も教育の必要性を感じた。また医療者と患者の不安に対する認識に違いがあり、医療者側は「注射の内容を間違えるのでは？」という不安を持っているが、患者側は「痛みに対する不安」が強いことがわかった。

医療者も常に緊張と不安の中で医療に取り組んでいる。しかし「確認したつもり」「説明したつもり」では患者に理解されず苦情や紛争に発展してしまうケースも少なくない。

今後も患者の意見を反映した安全対策に取り組んでいく。

①医療安全組織文化づくり宣言 ②医療安全

I. は じ め に

医療者と患者が目標を共有し、患者が積極的に医療に参加することが、安全な環境づくりの第一歩であると考え、平成18年4月に「医療安全組織文化づくり宣言」のパンフレットを作成し配布した。

パンフレットの内容が浸透し、実践できているか患者・看護師にアンケート調査を行ない評価検討した。

II. 方 法

1. 平成17年2月 職員全体研修でパンフレット内容の説明

2. 平成18年4月「医療安全組織文化づくり宣言」のパンフレットを全職員と入院患者に配布。外来患者は閲覧できるようスタンドに設置した。

3. 看護師へのアンケート調査（配布2週間後）

期間：平成18年4月15日～4月20日

4. 入院患者へのアンケート調査（配布5か月後）

期間：平成18年8月1日～8月7日

注1：パンフレットの内容

第1章：職員の医療安全の指針

第2章：患者・家族の医療安全の指針

（目標）

1. 患者の安全確保を最優先する。

2. 安全確保のためにシステム改革を実行する。

3. 患者・家族と一緒に事故防止に努める。

^{*} 〒498-8502 愛知県弥富市前ヶ須町南本田396
海南病院医療安全管理部

^{2*} 同 脳神経外科
（受付：2007年7月23日）

＊以上の３点を共通の目標とした。

注２：アンケートの内容

- １．注射を実施する時や薬を渡す時に、本人確認を患者と一緒にに行っているか患者に確認する。
- ２．注射を実施する時や薬を渡す時に、本人確認を患者と一緒にに行っているか看護師に確認する。
- ３．患者の医療事故（注射）に対する不安
- ４．看護師の医療事故に対する不安

Ⅲ．結 果

１．看護師のアンケート結果（表１）

「医療安全組織文化づくり宣言」のパンフレットを配布し、２週間後に看護師に行なったアンケート調査結果では、「医療安全組織文化づくり宣言」の内容が十分浸透せず、注射を実施する時に患者と一緒に「いつも確認する」35%、「時々確認する」が57%、「確認しない」が8%と確実に実施できていなかった。できない理由として、「患者の年齢や疾患の背景から

協力が得られないから」という意見が多かった。

看護師が不安を感じる理由について（表２）

「いつも時間に追われているため、集中力に限界がある。」「人間であり100%ではないから、いつ自分もミスをしてしまうか不安。」「あまり経験がないことを実施しなければならないとき」に、ミスをするのではないかと不安と看護師は常に不安と緊張の中で、注射や投薬を実施していることが伺われた。

２．患者アンケート結果

注射を実施する時や薬を渡す時に、本人確認を患者と一緒にに行っているか患者に確認する（表３）。

本人確認に対する患者からの評価として、「看護師はいつも確認する」90%、「時々確認する」が8%、全体の98%はほぼ実施できているとの回答が得られた。しかし「できていない」2%の理由として、バーコード方式で確認するが、一緒に確認しない看護師もいるとの指摘があった。

表 1

表 2

表 3

表 4

注射に対する不安について（表4）

「注射を受けるのに不安はない」と答えた人は82%，理由は「看護師を信頼している」「一緒に確認してもらい安心する」という回答であった。

「不安がある」と答えた人は18%で、「1回で針が入るか心配」「失敗されると痛い」という技術的な内容が多く、注射の内容などを間違えるのではないかという不安はなかった。

IV. 考 察

患者対象アンケートにより、約90%が看護師は一緒に確認ができていると答えているが、一部確認していないとの内容もあり、引き続き本人確認の実施状況や他職種における本人確認の実施状況を調査する必要性を感じた。

患者が不安を感じる理由として、看護師の注射行為の技術に対する不安の訴えが多くみられ

た。当院は経験が浅い看護師が多く、25歳未満が全体の38%を占め、注射の技術の向上と不安を緩和できるようなコミュニケーション技術を高める安全教育が課題であると痛感した。

V. ま と め

医療者は常に緊張と不安の中で医療に取り組んでいる。しかし「確認しているつもり」「説明したつもり」では患者に理解されず苦情や紛争に発展してしまうケースも少なくない。

今後も医療者の安心と、患者の安全を確保するためにも、「患者・家族と一緒に事故防止に努める」安全対策に取り組んでいきたい。

参 考 文 献

- 1) 厚生労働省医政局. 医療安全対策検討会ヒューマンエラー部会. 安全な医療を提供するための要点, 2004版.

Working on Patient-Participation-Type Safety Measures in Medical Services

Yukari TOTANI* and Naoto YAMAMOTO^{2*}

In April, 2006, we made and distributed the pamphlet entitled “Declaration for safety measures in medical services.” Because we thought that sharing with patients in the safety target could lead to create a safe environment in the hospital.

To make certain whether inpatients and nurses understood and practiced the declaration, we took a questionnaire survey. The results showed that about 90% of the medical staff and inpatients understood the declaration and thought it worked out well. However some of the medical staff answered that they thought it did not work out. We felt the necessity to educate the medical staff thoroughly. Moreover, we found out differences in the recognition between medical staff and patients. For example, medical staff wonders if they mistake the contents of injections. But most of patients worry about pain.

The medical staff is always working nervously and anxiously. However, there are quite a few cases in which complaints or disputes result from insufficient understanding by patients although medical staff thought that it was checked and explained.

We are now working on safety measures reflecting patient’s opinions.

Dept. of Declaration for safety measures in medical services, ^{2}medical safe management